日汉动词构式的认知对比研究

日中両語における自・他動詞構文の認知的対照研究

姚艳玲 著

全国百佳出版社
中央编译出版社
CCTP
Central Compilation & Translation Press

日汉动词构式的认知对比研究

日中両語における自・他動詞構文の認知的対照研究

姚艳玲 著

阜阳师范学院图书馆
藏书

全国百佳出版社
中央编译出版社
CCTP
Central Compilation & Translation Press

图书在版编目（CIP）数据

日汉动词构式的认知对比研究 / 姚艳玲著. —北京：中央编译出版社，2012.8

ISBN 978-7-5117-1485-5

Ⅰ.①日… Ⅱ.①姚… Ⅲ.①日语—动词—对比研究—汉语 Ⅳ.①H364.2②H146.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2012）第 185641 号

日汉动词构式的认知对比研究

责任编辑：王曷灵
责任印制：尹 珺
出版发行：中央编译出版社
地　　址：北京西城区车公庄大街乙 5 号鸿儒大厦 B 座（100044）
电　　话：（010）52612345（总编室）（010）52612365（编辑室）
（010）66161011（团购部）（010）52612332（网络销售）
（010）66130345（发行部）（010）66509618（读者服务部）
网　　址：www.cctpbook.com
经　　销：全国新华书店
印　　刷：三河市华东印刷有限公司
开　　本：710 毫米×1000 毫米 1/16
字　　数：243 千字
印　　张：13.5
版　　次：2012 年 9 月第 1 版第 1 次印刷
定　　价：42.00 元

本社常年法律顾问：北京大成律师事务所首席顾问律师 鲁哈达

凡有印装质量问题，本社负责调换，电话：010-66509618

目　录

CONTENTS

第1章　序論 …… 1

1.1　本研究の目的 / 1

1.2　本研究の理論的枠組み / 2

1.2.1　事態認知モデル / 4

1.2.2　プロトタイプ理論 / 5

1.2.3　スキーマ理論 / 6

1.3　本研究の概要 / 7

第2章　日本語の変化他動詞文のカテゴリー化：中国語の“把”構文との対照を通して …… 10

2.1　はじめに / 10

2.2　日本語の変化他動詞文 / 11

2.2.1　先行研究 / 11

2.2.2　変化他動詞文のプロトタイプ / 12

2.2.3　統語的構造 / 13

2.2.4　意味的構造 / 13

2.2.5 変化他動詞文の拡張ネットワーク / 14
2.3 中国語の“把”構文 / 20
2.3.1 先行研究 / 20
2.3.2 “把”構文のプロトタイプ / 21
2.3.3 統語的構造 / 22
2.3.4 意味的構造 / 22
2.3.5 “把”構文の拡張ネットワーク / 23
2.4 日中両語の変化他動詞文の拡張の仕方の違い / 32
2.5 「非意図的他動詞文」における日中両語の対照 / 34
2.5.1 先行研究 / 34
2.5.2 「非意図的他動詞文」における拡張の仕方 / 37
2.5.3 日中両語における「非意図的事象」を表す形式の対応様相 / 40
2.6 本章のまとめ / 45

第3章 日本語の無生物主語他動詞文成立のメカニズム:中国語との対照を通して …… 47
3.1 はじめに / 47
3.2 先行研究の概観と本研究の立場 / 49
3.3 本研究の考察範囲 / 50
3.4 無生物主語文における意味的拡張の仕組み / 51
3.5 無生物主語文における日中対応の様相 / 60
3.5.1 日本語の無生物主語文に対応する中国語の表現形式 / 62
3.5.2 中国語の無生物主語文に対応する日本語の表現形式 / 62
3.6 本章のまとめ / 65

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第4章 日本語の変化自動詞文における言語化のメカニズム：中国語の変化自動詞文との対照を通して …… 67

4.1 はじめに / 67

4.2 先行研究と本研究の立場 / 68

4.2.1 影山(1996,2000,2001,2002) / 68

4.2.2 本研究の立場 / 70

4.3 日本語の変化自動詞の特徴 / 71

4.3.1 形態的特徴 / 71

4.3.2 意味的特徴 / 75

4.3.3 意味的派生 / 77

4.4 中国語の変化自動詞の特徴 / 78

4.4.1 事態認知モデルによる中国語自動詞の捉え方 / 79

4.4.2 形態的特徴 / 81

4.4.3 統語的特徴 / 82

4.4.4 意味的特徴 / 84

4.5 日本語の変化自動詞に対応する中国語の表現形式 / 86

4.5.1 自発的な変化を表す場合 / 86

4.5.2 非自律的な変化を表す場合 / 88

4.6 中国語の変化自動詞に対応する日本語の表現形式 / 93

4.7 本章のまとめ / 97

第5章 日本語の自動詞による無標識可能文の成立のメカニズム：中国語の“V不C”構造との対照も含めて …… 100

5.1 はじめに / 100

5.2 先行研究とその問題点 / 101
5.3 本論の枠組みと理論的根拠 / 103
5.3.1 可能文の捉え方 / 103
5.3.2 有対自動詞の意味的特徴についての記述 / 105
5.4 無標識可能文の規定される条件 / 107
5.4.1 有対自動詞についての語彙的・意味的条件 / 107
5.4.2 <可能>の語用的条件 / 111
5.5 無標識可能文の意味素性 / 113
5.5.1 主体性 / 113
5.5.2 働きかけ性 / 115
5.5.3 結果性 / 116
5.6 無標識可能文の類型 / 116
5.6.1 <恒常的状態>を表す<潜在的可能> / 118
5.6.2 <一時的状態>を表す<潜在的可能> / 119
5.6.3 <実現的可能> / 119
5.7 まとめ / 120
5.8 <不可能>事象の言語化における日中両語の対照 / 121
5.8.1 問題提起 / 121
5.8.2 “V 不 C”構造の意味的特徴 / 124
5.8.3 “V 不 C”構造の意味的類型 / 127
5.8.4 日本語の「無標識の不可能文」に対応する中国語の表現形式 / 129
5.8.5 中国語の“V 不 C”構造に対応する日本語の表現形式 / 130
5.9 本章のまとめ / 132

第6章　日本語のヲ格名詞句を伴う自動詞文の成立のメカニズム …… 134
6.1　はじめに / 134
6.2　ヲ格自動詞文の類型 / 135
6.3　先行研究とその問題点及び本論の立場 / 137
6.3.1　移動性自動詞構文について / 137
6.3.2　再帰性自動詞構文と変化性自動詞構文について / 139
6.3.3　先行研究の問題点及び本論の立場 / 140
6.4　ヲ格名詞句を伴う自動詞構文の成立条件 / 141
6.4.1　ガ格名詞句の特徴 / 141
6.4.2　ヲ格名詞句の特徴 / 143
6.4.3　ガ格名詞句とヲ格名詞句との意味関係 / 148
6.4.4　主体がヲ格名詞句にどのように関与しているか / 150
6.4.5　まとめ / 152
6.5　ヲ格自動詞文の「他動性」の動機付け / 152
6.6　本章のまとめ / 156

第7章　日本語の「ヲ格＋移動動詞」構文における言語化のメカニズム：中国語の移動動詞との対照を通して …… 160
7.1　はじめに / 160
7.2　移動事象を構成する諸要素 / 161
7.3　日中両語の移動動詞の語彙化パターン / 162
7.4　語彙化パターンによる日中移動動詞の分類 / 164
7.4.1　様態動詞 / 164
7.4.2　経路動詞 / 164

7.5 日本語の「ヲ格＋移動動詞」構文とそれに対応する中国語の表現形式 / 166
7.5.1 「ヲ格＋移動動詞」構文の事象構造 / 166
7.5.2 中国語の移動動詞構文の形式的パターン / 167
7.5.3 「ヲ格＋移動動詞」構文に対応する中国語の表現類型 / 169
7.6 日中対訳データにみる移動動詞の語彙化パターン別の分布状況 / 174
7.6.1 分布状況 / 174
7.6.2 事例分析 / 176
7.7 中国語の移動動詞表現に対応する日本語の表現形式 / 178
7.7.1 経路の表現様式 / 178
7.7.2 中日対訳データにみる移動動詞の語彙化パターン別の分布状況 / 180
7.8 本章のまとめ / 183

第8章 結論 …… 185

参考文献 …… 191
索 引 …… 202
后 记 …… 204

第1章
序論

1.1　本研究の目的

日本語では因果性が係わる事態の言語化において、(1) のような典型的他動詞構文や (2) のような典型的自動詞構文が用いられる。しかし一方，典型的形式のパターンから逸脱した，他動詞・自動詞らしさに欠けた他動詞・自動詞構文も存在する。例えば，(3) のような非意図的他動詞文，(4) のような自動詞による無標識の可能文，(5) のような意味的に自動詞でありながらヲ格名詞句を伴う自動詞文などである。

(1) a. 太郎がグラスを割る。
　　b. 子供がおもちゃを壊す。
　　c. 猟師が熊を殺す。

(山梨 1995：239)

(2) a. グラスが割れる。
　　b. おもちゃが壊れる。
　　c. 熊が死ぬ。

（3）子供がお金をなくす。

（山梨 1995：240）

（4）いくら押しても窓が開かない。

（ヤコブセン1989：240）

（5）a. 一郎は選手生活を終わった。

b. 一郎が勝手に座席を替わった。

c. 子供が横断歩道を渡る。

（須賀 1981（須賀・早津 1995 所収）：123～132）

このような「形式と意味の非対応現象」は日本語を第二言語として学ぶ学習者にとって学習の妨げとなりうるものであり，特に日本語と異なる言語化のメカニズムをもつ中国語母語話者にとっては習得困難点である。本研究はこれまで十分に解明されてこなかった日本語における自動詞・他動詞構文の「形式と意味の非対応現象」に包括的な説明を与え，自動詞・他動詞構文の言語化のメカニズムにおける中国語との相違を提示し，日本語と日本語教育研究に資することである。

本研究は認知言語学の理論を分析の枠組みとしている。これらの構文の成立要因を認知言語学的観点から明らかにしたことによって，日本語学習者により自然で，洞察的な方法で自動詞・他動詞構文を学習する指針を与えると考える。また中国語との対照で日中両語の同一事態に対する捉え方の違いを明らかにしたことによって，中国語を母語とする学習者に中国語との相違を理解する手助けを与えるものと考える。

1.2 本研究の理論的枠組み

日本語における周辺的自他動詞構文の拡張する動機付け，及

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

び日中両語における自動詞・他動詞構文の言語化の相違を説明するために，どのレベルでの対応関係を掘り起せば，その異同を見極めることができるのだろうか。本研究では認知文法の基本的理論を分析の基盤にしている。

西村（1998：112）によれば認知文法を他の多くの理論から区別する大きな特徴はその文法観にあるといえる。認知文法では，文法的な知識の単位は形式と意味との組み合わせ――一種の記号――であると考えている。すなわち，文法を構成する単位はそれぞれ特定の意味をもつと考えるのである。本研究の対象である自動詞・他動詞構文との関連で言えば，これらの構文が示す文法的な振る舞いはすべてこれらの構文に特有の意味との関連で説明されるということになる。言語表現の意味は，記述対象である客観的なものや事態そのものから一義的に決まるのではなく，そのものや事態がどのように（たとえば，どういう視点から，どこに着目して，何との関連で）捉えられているかという要因を慣習的に組み込んでいると考えているのである西村（1998：113）。すなわち，異なる言語の文法構造の相違は意味上の差異を反映しており，この意味上の差異は捉え方の対立に起因するのだと捉えるものである。

このような認知文法論的観点からみれば，本研究のテーマである自動詞・他動詞構文が記述対象としての事態に対するいかなる捉え方を表しているかが決定的に重要な役割を果たすということになるため，日中両語の自動詞・他動詞構文を比較対照する際に，両言語の文法構造上の相違はどのように意味構造上の差異に対応しているのかが分析の主眼となると考える。これによって，他動性・自動性が係わる同一事態に対する日中両語の捉え方の違いが明らかになると思われる。

以下，認知文法の基本的な概念と理論を概述する。

1.2.1 事態認知モデル

他動性・自動性の問題は日常言語の事態認知と係わっている。認知言語学では外部世界の事態を，事態に係わる参与者間の相互作用として理想化し捉え，認知モデルによって端的に表している（代表的にはCroft（1990）による causal chainや Lanagcker（1990）による billiard-ball model，あるいは action chainといったモデルが挙げられる。山梨 1995：252，谷口 2005：120 参照）。

（6）（=1）a. 太郎がグラスを割る。
b. 子供がおもちゃを壊す。
c. 猟師が熊を殺す。

（山梨 1995：239）

（6）の典型的他動詞文が反映する事態関係は認知モデルによって表示すると図1のようになる。

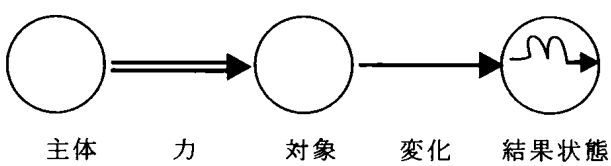

図1 典型的他動詞文の認知モデル

（6）の事態変化（「グラスが割れる」「おもちゃが壊れる」「熊が死ぬ」）はある存在からほかの存在への力の推移によって規定される。図1は動作主（「太郎」「子供」「猟師」）がある手段によってある行為を行った結果，対象（「グラス」「おもちゃ」「熊」）に状態変化（「（グラスが）割れる」「（おもちゃが）壊れる」「（熊が）死ぬ」）が引き起こされるという事態認識のパターンを示している。

一番目のサークルは状態変化を引き起こす存在を示し，二重

の矢印は状態変化を引き起こす存在の力の推移を示す。二重の矢印の向けられるサークルは動作・行為の及ぼす対象であり，それにつづく矢印は対象における変化の過程を示し，その結果状態は破線の矢印が加わるサークルによって示される。

また（7）のような典型的自動詞文は次の図2のように表示できる。

（7）（=2）a. グラスが割れる。
b. おもちゃが壊れる。
c. 熊が死ぬ。

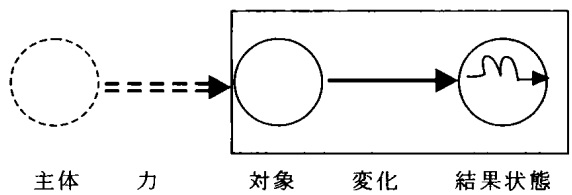

図2　典型的自動詞文の認知モデル

ボックスは言語化されている部分を示し，点線のサークルと二重の矢印は意味的に含意されながら言語化されていないことを示している。

図1の認知モデルは外部世界を理解する基本的な関係である<因果関係>を規定しており，これによって自動詞・他動詞構文に関する特徴づけや意味的拡張の動機付けが可能になる。以下，本研究ではこの認知モデルを用いて自動詞・他動詞構文の特徴づけ及び拡張の動機付けを分析する。

1.2.2　プロトタイプ理論

認知文法では「プロトタイプ理論」と呼ばれるカテゴリー化に関する新しい考え方が採用されている。すなわちカテゴリーはプロトタイプと呼ばれる，基本的と考えられる成員を中心に

して，その周辺にプロトタイプからの（何らかの原理に基づく）拡張としての非中心的な成員を配するという形で構成されている，という考え方である（西村 1998：115 参照）。

本研究との関連でいえば自動詞・他動詞構文という文法的なカテゴリーには（1）（2）のような典型的事例から（3）（4）（5）のような周辺的事例へ拡張が行われており，典型例と周辺例との間に何らかの意味上の動機付けによって関連づけられていると考えられる。

このような考え方をとることによって典型例と周辺例との間の共通性を見出すことができるだけでなく，異なる言語間の周辺例へ拡張される程度の差異も説明することができる。

1.2.3 スキーマ理論

カテゴリー化に対する認知言語学的思考はプロトタイプ理論のほかにもう一つ重要なのはスキーマ理論である。カテゴリーメンバーに当てはまる共通性（スキーマ）を抽出して，カテゴリーを規定するという考え方である。スキーマ理論とプロトタイプ理論はカテゴリー形成のそれぞれ異なった側面に焦点を当てた，互いに両立するものと位置づけられており，実際にはこの両者が同時に相互作用することで，一つのカテゴリーが構築されると考えられている（河上 1996：47，早瀬 2002：162，中村 2004：199など参照）。

認知言語学ではカテゴリー化に係わる認知プロセスについて次の図 3のように規定されている（山梨・有馬（2003：61 ~ 62），河上（1996：51 ~ 52），中村（2004：199 ~ 200）など参照）。

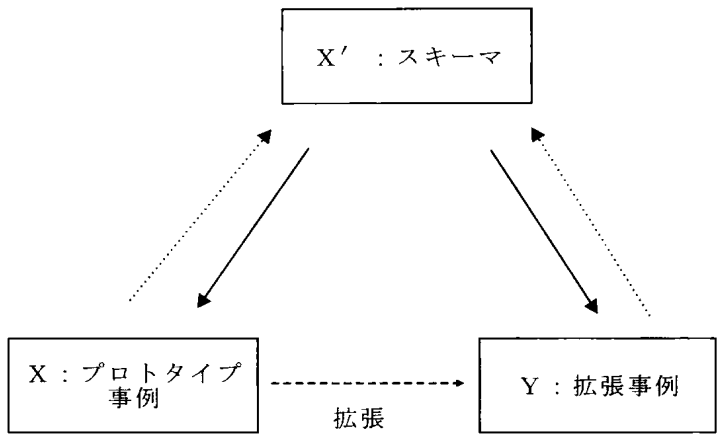

図3　カテゴリー化に係わる認知プロセス

図3に示されているように，カテゴリー化に係わる認知プロセスは，（ⅰ）スキーマに基づく事例化，（ⅱ）プロトタイプに基づく拡張，（ⅲ）具体事例に基づくスキーマ化，という三つのプロセスとして区別されている。

図3の実線の矢印（⟶）は，スキーマから具体事例（X，Y）への認知プロセスを示している。破線の矢印（---▸）は，プロトタイプとしての典型事例から拡張事例への認知プロセスを示している。さらに，点線の矢印（……▸）は，プロトタイプの典型事例と拡張事例の類似性，共通性に基づいてスキーマを抽出していく認知プロセスを示している。

スキーマ理論は自動詞・他動詞構文という文法的カテゴリーの本質的な特徴を捉えるのに重要な道具立てであり，プロトタイプ理論と同様に自動詞・他動詞構文の特徴づけを，意味的な共通性と意味的な拡張という観点から捉え直すことができる。

1.3　本研究の概要

本研究は日本語の自動詞構文・他動詞構文の拡張に関わる言

語事象を広く取り上げ，典型的自動詞構文・他動詞構文から拡張されるメカニズムを認知言語学的観点から解明を行った。また中国語の典型的，拡張的自動詞構文・他動詞構文と比較対照することによって，二言語間における基本的事態認識の言語化の相違を明らかにした。

第1章で認知言語学の事態認知モデルや基本的な理論を述べた後，第2章から第7章では認知言語学の枠組みを適用し，日中両語の自他動詞構文の特徴や拡張事例の動機づけなどについて対照分析し，体系的な説明を行った。

第2章では「太郎がグラスを割る。」のような＜変化＞と＜因果関係＞を反映する他動詞構文のカテゴリー化を行い，中国語における高い「他動性」を有する“把”構文との対照を行った。行為と結果との関係の緊密度によって，日中両語における典型的他動詞文から「非意図的な他動詞文」など周辺的な他動詞文への拡張の方向と程度が異なっているということを提示した。

第3章では「大水が家屋を押し流した。」のような無生物名詞句を主語にとる他動詞文という文法現象を取り上げ，認知言語学という研究プログラムによりその成立要因を分析した。また無生物主語他動詞文における日中両語の対応形式の違いに基づいて，無生物主語に係る日中両語の「捉え方」の違いを明らかにした。

第4章では「グラスが割れる。」のような対象物の非自律的な変化を表現する自動詞構文の特徴づけを行い，自動的事象変化の言語化において，日本語は自動詞文として，中国語は自動詞文だけでなく，他動詞文や受動文などの構文にも言語化される傾向にあることを示した。

第5章では「いくら押しても窓が開かない。」のような自動詞による無標識の可能文を取り上げ，その成立には「自動詞の意

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com